
魔法少女リリカルなのはStrikerS 合言葉はCRAZY！

テラ吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 合言葉はCRAZ
Y!

【Nコード】

N4186X

【作者名】

テラ吉

【あらすじ】

新暦75年。落ちこぼれ、犯罪者集団などと文句を言われている部隊からある一人の人物が機動六課に派遣される。これはそんな魔法少女リリカルなのはStS再構成小説です。

第0話（前書き）

書き直しのプロローグです。
大変申し訳ありません。

第0話

8年前

ノイズの交じった念話からは、もう悲痛な同僚の悲鳴しか返っては来なかった。

出来ることなら、出せる限りの悪態を吐いてしまいたい気分だ。

こんな状況、誰が考えた？ 誰が仕組んだ？

いつもはちゃんと働かない脳をフル回転させ、青年はこの圧倒的に不利な状況 未知の機械兵器たちと一人で戦っていた。

魔力をかき消すフィールド アンチマギングフィールド AMFを持ち、こちらを確実に殺そうとしてくる数十機もある機械兵器の群れの中で。

“施設”に入っていた前線部隊のメンバーとは連絡が取れず、青年と同じく後衛のメンバーは青年を残して全員が死亡した。

目の前で、ケーブルを振り回し、先っぽに付いたアンカーで青年を刺し殺そうとする機械兵器の手によって。

(クソ、いったいどうなってやがんだ?)

眼前に迫るケーブルを避け、屍と化した同僚の上を飛び越える。そこに機械兵器から熱戦が放たれるが、地面に転がって避ける。仕返しとばかりに、起き上がりざまにデバイス 二丁拳銃から魔力弾を撃ち出すが、AMFにかき消され、青年は舌打ちする。

「魔導士に対してAMFとか完全に嫌がらせだろ！」

魔法がかき消されて話にならん！ そう叫びながら青年は最近取り付けてもらったマガジン式カートリッジを差し替え、補充する。
バリアジャケット
BJの懐からカートリッジを取り出したが、もうこれが最後のカートリッジであり、これを使い切れれば青年は戦術をなくすだろう。ならばこのまま無様に逃げるのがベストなのか？

「冗談じゃねえ……！」

前線部隊のメンバーが戻ってきたときに、俺が道を確認してなくてどうする？

俺があの人たちを出迎えなくてどうする？

あの人たちの期待に応えられなくてどうする？

『なるべく早く戻る』

『頼んだわよ？ 期待してるんだから！』

『無茶はしたら駄目よ？』

俺が頼られていて

補充した白と黒の二丁拳銃を握り直し、

俺しかない状況で

トリガーガードに指をかけ、

俺がやらなくてどうする？

「行くぜ？ 相棒」

《All right!》

青年の問いに、白と黒の二丁拳銃は了承の合図を出す。

「Com・n winp!!（かかって来いよ、ノロマ野郎!!）
皆が戻るまで、俺が相手をしてやる!!」

締めとばかりに中指を突きつけ、飛んできたレーザーを横に転が

り回避する。

「
《 Let's Rock!! 》
」

そして青年は二丁拳銃を構え、機械兵器の群れへと突っ込んだ。

6年前

シトシトと雨が降り続ける中、二年前の青年は黒いコートを羽織っただけで傘も差さずに墓地で一人佇んでいた。
右手には酒瓶が握られており、その右手は震えていた。
その震えは雨の冷たさからだろうか？

否。

その震えは寒さからではない。

その震えは 憤りやら悲しみやら、全ての負の感情がグチャグチャになったものだ。

青年は酷く後悔した。

どうしてこうなった？ どうして俺が生きている？ どうして“こいつ”が侮蔑されなくてはならない？

冷えた頭で青年は考える。

そうして暫く考えて、青年は自分の左腕を見た　失くした左腕を。

「俺が左腕で、お前が命……割にあわねえだろうが……！」

絞り出すような声で青年は墓に文句を言う。

「……………」

次に出る言葉はここに来てもう何回目だろうか。

言ったところで、墓から返事が来るわけでもない。
言ったところで、あいつが生き返るわけでもない。
言ったところで、無念を晴らせるわけでもない。

わかっている、わかっている……でも、！

「い、めんなさい……」

謝らずにはいられなかった。

この墓にいる者に、そしてこの墓の者の血縁者。
まだ会ったこともない、正確には会えない

妹に向けて。

青年は涙を流し、墓に酒瓶を置いた。

この墓の者が初めて飲んだ酒瓶を。

何度も、何度も、何度も墓に謝りながら。

そうして青年は墓地を離れた。

第0話（後書き）

話数も少ないのに書き直しかざけんじゃねえぞ！ 言われても仕方のないことをしてしまい大変申し訳ありません。大幅な変更は活動記録に書いています
すみません；

第1話『Crazy Fall』

現在

クラナガン郊外のリニアレールの線路の遙か上空。

凍てつく様な寒さの高度を一人、漆黒のコートを纏った青年がボードの様な一枚の板に乗って空を滑空していた。

そのボードは真紅に塗られ、スノーボードの様な形をしており、片側は丸く、反対側には丸い円筒形の物体が二つ、板に平行に取り付けられている。

この円筒形の物体から魔力ブースターが噴き出し、これで空が飛べる仕組みなのだ。

名前は兵員戦域強行突入板、名称『ジェットボード』。

飛行魔法が使えない者たち様に向けて制作された試験用の飛行道具　をこの青年が改造した物。

だから正確には青年の付けた名前がこのボードにはあり、その名は『ハンニバル』と呼ばれる。

因みに、この名前を聞いた青年の同僚はレクターという名のドクターを思い浮かべたとは別の話。

そのハンニバルの上から、青年は遙か下方の線路を双眼鏡で見下ろしていた。

「OK。線路が見えた、空は快晴です」

『了解だ。目標が到達し次第、テメエの好きなように動け』

漆黒のコートを纏う者の報告に、耳に付けたインカムから粗野な言葉づかいの女性からの指示が入る。

それに「Aye, ma'am!」と返事し、目標はまだかまだかと待ち続ける。

そうして待つ間が退屈なのか、左腕　今は無き筈の　に
着けられた、薄汚れた銀の髑髏の腕輪をコツコツと指で叩いた。
すると、呼応したかのように髑髏の目が紅い光を灯す。

《んだア？　任務……じゃ、なさそうだなア？》

「残念、まだ目標は視界に入っちゃいないのよ」

漆黒のコートを纏う者の返答と、肩を竦める仕草に腕の髑髏の口
がカタカタ動く。

それは紛れもなく嘲笑で、髑髏の腕輪に嘲笑された側は苦笑いで
再度双眼鏡を覗き込む。

「んー、目標は未だ見え」　来たぞ！　目標確認した……機
影は？」

『JF704式……クソ、流石はエリートってところか？　ウチの
ところにもこの武装隊用の最新機があればな……！』

インカムからの女性上司の後半愚痴部分は聞き流し、双眼鏡のレンズを覗き込む。

見たのは先ほど上司が愚痴った最新式の武装ヘリ。

「へえ……あれ、ねえ？」

中々に高級そうなヘリだ。

そんな感想を抱き、懐からジェインの様なお面を取り出し、装着して髑髏の腕輪 インテリジェントデバイスを叩く。

わかっているとわんばかりに目がビカビカ光る。

行くぜ？

All right!

念話も会話もなく、“アイコンタクト”で一人と一機はハンニバルから 飛び降りた。

「《ゼロオオニモオオツ！！》」

景気付けとばかりに大声を張り上げ、両手を広げて馬鹿と髑髏はそのまま遙か下方のリニアへ向けてダイヴしていく。

馬鹿が行動を起こす、数十分前

八神はやて二等陸佐は目のモニターと手に持つ書類の両方を同時に目を通していた。

そのどちらもはこれから機動六課両方に出向してくる局員であり、『出向』とデカデカと書かれた二文字が目立っていた。

「ゲンヤさんから勧められた局員やけど……」

手に持つ資料を親指、人差し指、中指で摘まみ、ヒラヒラと自分の前で揺らし出す。

そんな部隊長に有能な部隊長補佐であるグリフィス・ロウラン準陸尉は「オホン」と注意の意味を込めた咳を一つ。

「ああ、堪忍な。んでグリフィスくん……これ、どう思う？」

「これ、ですよね？」

彼にも同じ書類が配布されており、それを上司に見せながら彼は眉間に皺を寄せる。

アカンよ、グリフィスくん……そんな若い内から眉間に皺寄せるとどこぞのタヌキ腹中將になるで。と心の中で呟き、補佐を見続ける。

数秒間、書類とにらめっこしていた彼は書類に笑かされることなく顔を上げて一言。

「真っ黒ですね」

「真っ黒やねん」

何が真っ黒なんだと言いたいが彼女たちの持つ書類とデータは何故かその局員の一つ前の所属部隊の経歴部分だけを残し、他は何故か真っ黒になっており、表示されない、見えないのだ。

この部隊にやばい奴がくるのか……。

どこか遠い目で二人は天井を見上げ、機動六課解散という文字が頭を過る。

いくら彼女の師、ゲンヤ・ナカジマからのお勧めとしてもこれはない。

経歴真っ黒な局員？ え、犯罪者っすか？

そんな言葉が今すぐに口から出そうな二人。

「でも、一つ前の所属してた部隊は書いてあんななあ」

「“雑士422部隊”……そんな部隊は聞いたことがありませんね」

「そもそも、雑士ってなんなん？」

「雑務、ですかね？」

グリフィスの発言にはやての頭には雑務「パシリに変換され、彼女の脳内では犯罪者のパシリと浮かび上がる。

因みに彼女のイメージ内の局員の姿は、もやしっ子がメリケンサックとグラサンを装備しオラオラ言う姿。

よくわからない物が付いているし、微妙に発想が古いぞ、八神はやて（19）

「あちらの、422の部隊長とは話をしているのでは？」

「一応したけど　あのデカ乳はアカン！　あれは魔性の乳や！

Hカップはあつたでっ!？」

「何を話に行かれたのですか!？」

部隊長の突拍子のない発言と手をワキワキと不気味に動かす姿に補佐のツッコミが冴えわたる。

まあ、冴えわたったところで彼女にとっては乳>漫才だから気にした様子もなく「あれは揉みがいいが…!」とブツブツ呟くだけなのだが。

いつも通りのはやてに呆れ、彼はあることを思い出す。

そして一言。

「その方はいつ配属ですか」

「ああ、それなら」

グリフィスの問いに、日にちを答えようと彼女が口を開いた瞬間だった。

機動六課の隊舎すべてに、『ALERT』が鳴り響いた。

現在

遙か上空から青年が降下するなか、青年は自分より低い位置にあるヘリから降下していく局員の姿に目を見開いていた。

それと言うのも、先に降下した者を含め、女性四人に男性一人。全員が若い少年少女だからだ。

先に飛び出していたのは誰だかなんとなくわかるが、後の四人組は若すぎる。

高度の問題でハッキリとは見えないが、二人ほどは小学生くらいの子供にしか見えない。

《おいおい、えれえ若いのがいやがるぜエ?》

「あの人が見たら嘆きそうな光景だな」

学生の本分は遊ぶことなのに。

爺臭い考えをしながら、一人と一機は眼下で始まる戦いを降下しながら眺める。

先に降下した女性は空を舞い、機械兵器 ガジェットを華麗に撃ち落ちしていく。

「純白の天使か？」

青年は以外にも顔のお面に似合わないロマンチストな発言し、その天使の戦い方を特に眺める。

腕輪の罫體は「白い悪魔の間違いだろっがア」というが、彼はガ
ン無視。

引き続き、彼曰くの天使を見続ける。

が、そんな状態も長くは続かない。

青年のインカムに粗野な女性上司から連絡が入る。

『任務のおさらいといこうか、愚図野郎』

「あー、はいはい。任務内容は 機動六課の初陣サポート＆
出向”の顔合わせ、ですよな？」

青年の答えにインカム越しから上司が「そうだ」と答える。
その後になにやらトポトポと水音がBGMとして青年の耳に付く。
なんの音かはわかっており、青年は呆れた顔をするだけで何も言
わず一方的にインカムを切る。

「任務内容はわかってんな？」

《俺はデバイスだ。んなこたア重々承知だア》

髑髏の答えに笑みを浮かべ、彼は左腕を顔の横に突出し、叫ぶ。

「オルフェイス！ トゥーハンドガンズだ！！」

《T W O T W O T W O ! h a n d g u n s m o o d ! ! 》

青年の叫びに髑髏の腕輪が応える。

髑髏の真ん中から真つ二つに割れていき、それは二つの紅い光に
なり青年の周りを飛ぶ。

次の瞬間、光は弾け飛び、二つの光は黒と白の大型二丁拳銃と化
す。

青年は二丁拳銃のトリガーガードに指をかけ、腕を交差して構えた。

「Let's Rock!!」

銃口からは魔力の嵐が吹き荒れた。

第1話『Crazy Fail』(後書き)

新一話をやっところさ更新です。

なにやらむちゃくちゃ感が…；

精進します。

第2話『Crazy Ride』(前書き)

二話目投稿……文が少ない；

第2話『Crazy Ride』

耳元を空気が唸り声を上げて通り過ぎていく。

重力に引かれるまま、徐々に加速していく落下に対して青年は僅かな恐怖も抱いていなかった。

このまま地面に激突するなんて映像は脳裏に欠片も浮かんでいない。
ワイジョン

問題ない、高い所から落ちるのは慣れている。

晴天の空をダイビングしながら、青年は視線の先に、先行する遠方のヘリの尻を追う増援らしき敵影を捉えた。

落下し続け、距離の詰まりつつある現状でもまだ豆粒程度にしか見えない敵に早速先制攻撃を開始する。

「《Let's Rock!》」

青年と髑髏　　オルフェイスの馴染みの決まり台詞を吐き捨てると、両腕の銃口が火を吹いた。

物凄い速さで魔力弾が動き回る小さな的　　ガジェットドロ―ンを、狙い違わず貫通し、爆発。

「BINGO!」

文字通り、一気に火が付いた。

青年の顔　　お面で隠れて見えないが　　に浮かぶ笑みは深く、獣が牙を剥くそれへと一瞬で変貌し、暗い闘争心が燃え上がる。

旋回する集団のど真ん中で起こった爆発に、敵の意識が一斉に上空から迫る青年へ向けられる。

無機質な機械から向けられる意識に青年はすぐさま第二射を放った。

しかし、さすがはこちらと違って空を飛ぶ為の体。ガジェットの群れは弾幕へ飛び込む形で上昇しながらも各々回避行動を取る。

撃ち返される熱線、無数。超派手。

「Couldn't be better! (最高だ!)」

《You're telling me! (全くだ!)》

迫り来る脅威を目の前にして、青年とオルフェイスの理性が弾ける。最高のスリル。

頭から落ちる体勢のまま、迫る熱線を尻目に青年は何もせず受け入れる。

次の瞬間、無数の熱線は青年の体中に直撃する。

哀れお面青年は吐き気を込み上げさす、焼き人肉に　　はならず、平然とそのまま降下していく。

その青年の身体には薄らとだが、黒く濁った紅い魔力焰が鎧の様に纏わりついていた。

《Hellarmor! どうだBuddy?》

「おいおい、アレの相手にヘルアーマー? バリアぐらいで、いや、ノーガードでも良かったか?」

《ノーガードで焼けたコートが経費で落ちるんなら良いぜエ》

「そいつは困る」

困った様子もなく、広げていた両手を体に沿って伸ばし、頭から弾丸のように落下する体勢で加速を得ると、そのまま一回転して器用に頭の位置を下から上に変えた。

足から落ちていく形に体勢を変え、再度腕を交差し銃を構え直す。首だけ動かし、自分が落ちてきた場所に目を向ければ紅いジェットを噴かしたイカした板が青年目掛けて急降下してくる。

紅い板　　ハンニバルはそのまま青年の足元に潜り込み、青年はハンニバルに着地。

《途中のパラシュートなしのスカイダイビングはどうでしたかア、お客様ア？》

「ハッ！　最高に決まってるだろ？　W o w ・ H o , H o o o o o
！！」

大量の熱線が青年目掛け飛んでくるが、荒波に揉まれるサーフボードよろしくハンニバルを乗りこなし、熱線と言う名の入り組んだ波のトンネルを突き抜ける。

紅い魔力光を蛇、または龍の様な形に散布し、サーファアの道跡を残す。その空に描かれた軌跡は青年を追うガジェットにすぐ蹴散らかされるのだが。

「おいおい、尻を機械に追われるだなんてそんなに俺のお尻は最高か？」

《ああ、最高だア。銃口をぶち込むにはもってこいだア》

「そいつは簡便だ、よッ！」

まだまだ追ってくる熱線を身体ごとハンニバルを横に一回転することで避け、オマケとばかりに逆さまの体勢から銃口が火を吹いた。第三射目は条件が同じな為、難なく命中。爆発。屑鉄が地上に落ちていく。

そしてストップ。その場で浮遊した状態で、ガジェットに囲まれる。

前へ、後へ、上へ、下へ、左へ、右へ、前後上下左右を囲まれた青年は口角を上げた。

《見事に囲まれたなア？》

「OKOK、人気者は辛いもんだ」

両手の銃型デバイスを忙しなく動かし、トリガーを引かずに銃口を引っ切り無しにガジェットへと向けていく。

何がしたいのかはわからないガジェットはその動きを脅威と判断したのか、何もせず青年の周りを高速飛行する。

撃たずにひたすら銃口だけを高速で向け続ける。

何がしたい？

これがしたい。

青年の周りに五つのスフィアが形成される。

「さあ、おいしい蜂ちゃんをプレゼントだ！」

《Killerhornet!》

カートリッジ
排莢を排出すると同時にトリガーを引くと、青年の周りに形成された五つのスフィアから一斉に二発の魔力弾が射出された。

射出された誘導操作型の魔力弾は螺旋状に回転し、高速移動するガジェットに難なく追いつき、全てを貫いて爆発。

これで増援は全て破壊。

後はどうする？ 何をする？ わかりきつたことだ。

ハンニバルを蹴りつけ、前進開始。

任務を改めて見直す。

「機動六課の初陣サポートと “ 出向 ” の顔合わせ……」

合言葉はCRAZY！ 第2話『Crazy Ride』

「こ、後続のガジェットドローン部隊、全機撃墜確認！」

オペレーターのルキノ・リリエ二等陸士の驚愕で震える声に同じ
ロング・アーチである、八神はやてとグリフィス・ロウランは驚い
ていた。

サーチャー
索敵機でふざけたお面を付けた青年を見ていたが、圧倒的に無茶
苦茶だった。

バリアジャケット
空からBJを纏わずに急降下。そこからは流れる様な滅茶苦茶な
空中戦と言えるか怪しい空中戦。そして、その空中戦でガジェット
部隊を僅か数分で破壊。

「……何者や、あのマスクマン」

「資料にも書いてありますが タクヤ・D・アルバトロス二等
空尉です」

「そういうことやないんよ」

「勿論わかっております」

「……………」

だったら言うなよ、とはやての視線がグリフィスに突き刺さるが
当の補佐の本人は気にした様子もなく、どこかに移動するマスクの
青年　　タクヤ・D・アルバトロスを見続ける。

僅かだが前髪がお面の間から垂れて、タクヤの髪色がただの黒だ
けではなく中途半端に染められた紅色　　メッシュ色の髪が覗い
た。

途端に、何となくだがグリフィスはタクヤの素顔が気になった。

なぜ顔を隠す？　　純粋なそんな疑問。

ただ気になる。　　お面の下の顔はどんな顔だ？

そんな気持ちで視線を映像に向けていたが、ここの部隊長は八神
はやて。

男が同じ男　　だと思われる　　に視線を向け続ける。

それだけではやてには十分だったと言えよう。

「なんやなんや。グリフィスくんてば、そないにこの人が気になる
ん？」

ニヤニヤ。そんな擬音が付きそうな顔で映像のタクヤを指を差す。
この時、話を聞いていたルキノが少しだけ不機嫌そうになったの
をアルト・クラエッタ二等陸士は目撃してしまったのは余談だと言
えよう。

「ええ、気になりますね」

「……え？」

「冗談でおちよくる気持ちで言っただけなのに、返って来たのは普通に興味があるとの返答。」

はやてとしては「ふざけないで下さい！」と少し慌てながら返される物だと予想してばかりに面喰い、マジで男に興味あるんや……とグリフィスを見続ける。

そして、この時モルキノが不機嫌さを上乘せにした顔をアルトは目撃してしまったのは余談だと言えよう。

そうこうしている内に件の彼はリニアの尻が見える辺りまで近寄っていた。

そんなタクヤの横を、気づけばはやての友人であり、部下の高町なのは一等空位とフェイト・T・ハラウオン執務官の二人が並走して飛んでいた。

予め話をはやてから聞かされていた為か、二人はお面を被ったタクヤに怪訝な表情をするが協力してガジェットの迎撃に移行する。

空に紅黒と桃と金が舞う。

「Hallo! 機動六課の純白の天使様」

後ろからかけられたのはふざけた声。

高町なのは事前に友人であり、上司である八神はやてから、機動六課に出向してくる者がこの現地で集合すると言うのを知っていたため慌てなかった。

というより、愛機レイジングハートが後ろから魔力反応があると教えてくれたからでもあるからだ

「貴方が新しく機動六課に……」

異動してきた方ですか。

そう続くはずの言葉が、彼女からは続かなかった。

遠目からだが黒いコートを靡かせ、ボードみたいな物に乗っていたのは確認できたが顔は確認できていなかった。

そして今確認したのだ。彼の、タクヤの ジェイ ンの様なお面をつけた顔を。

感想？ ええ、驚きましたよ。彼の顔は白いですね。で、空気穴的な物が複数空いてるんですよ。

と、そんなジョークを言えるわけもなく、彼女は空中を進みながら硬直と言う器用なことしてみせる。

「ああ、おふざけしてすいません。今から機動六課に異動となり、サポートをすることになりました 雑士422部隊から参りました、タクヤ・D・アルバトロス二等空尉です」

ビシリ！ とタクヤは綺麗な敬礼を空飛ぶ板の上で行う。

なのはも釣られて敬礼するが、自己紹介をしていないのに気付き、こちらの自己紹介をしようと口を開いたところで、

「なのは、大丈夫!？」

親友兼同僚のフェイト・T・ハラウオンがハーケンフォームにした、愛機バルディッシュをタクヤの首筋に当てて、いつの間にかいた。

え、なにこれ？ え、えええ、なんでフェイトちゃんがマスク… 違う違う、タクヤさん だったかな？ を拘束して、あれ？ フェイトちゃんはやてちゃんから聞いてなかったっけ？

色々となのはの頭には処理できない情報が山のように湧き上がる。嗚呼、こういうときレイジングハートを頭に繋いで並列計算できないかな？

そんなパニくるなのはを置いて、タクヤとフェイトは緊迫していた(主にフェイトだけだが)。

「あー、なんだ？ 何故に俺がこんな状態に？」

《ヒヤハハハ！ 普段の行いがわりイからだろうがア！》

溜息を吐く、空飛ぶ板に乗ったお面を付けた男に笑う二丁拳銃。一目でデバイスと彼がそのマスターと気付いたフェイトはふと、ここである疑問が浮かぶ。

それは今日の早朝のことだ。

何か、はやてが言っていたような気がする。
とてつもなく大切な話だった気が……はて？

ふと浮かぶ疑問とお面を付けたタクヤを見る。

お面越したが、タクヤの視線とフェイトの視線が交差した。

気づいたタクヤがにこやかに手を振るが、ハーケンフォームの刃を近づければ即座に振っていた手を引っ込める。

思い出せそうなのが思い出せない！

喉まで手が出かかっているという、正にその表現が正しいフェイトに、ようやく頭がオーバーヒートしていたのはが復活。

状況を把握し、説明しようとして口を開いたところで、

「あー、今日付けで機動六課に配属されることになった、雑士422部隊から参りました、タクヤ・D・アルバトロス二等空尉です」

ああ、そういえばそんな感じの話だった。

で、私は何をしているのだろうか？ うん、今日付けで配属されることになった同僚の首にハーケン押し付け。

「……………」

ポクポクポクポクポクポク………チーン！

第2話『Crazy Ride』（後書き）

えー、早くも主要人物に接触。

お面つけた初対面の人に声かけられたら怖いですよね？

そんな感じで書いてみました。

後、戦闘描写が書きやすい……なぜに？

そしてフェイトファンの方にはごめんなさいです；

第3話『Crazy New face』

あれから互いに正式にかつ簡単な自己紹介を済ませ、空域を抑える為に三人は残りのガジェット殲滅に当たる。

銃口が火を吹き、砲撃が轟き、刃が唸る。

紅黒、桃、金といった閃光が真昼の空に光り、事情を知らぬ物には花火にしか見えないだろう。

そして、その花火が一番良く見たのは紅黒。つまりはタクヤの魔力光。

別にエースオブエースみたいに砲撃を放つわけでもなく、ただ延々と集束・圧縮された誘導性を付加していない魔力弾を高速で撃ち続けるだけ。

カートリッジに溜めた魔力を使うわけでもなく、だ。

「あの人、魔力が尽きないの…？」

もはや戦闘というより単なる射的ゲームとなりつつある一方的な戦況に、ハーケンでガジェットを切り裂きながらフェイトの口からポロリと洩れる。

「さつきから一発も外してない……」

周囲を敵に囲まれながら余裕すら見せて弾丸を命中させていくタクヤのテクニクになのはは感嘆し、半ば呆れる。

無茶な姿勢や無謀な状態で攻撃するタクヤのスタイルは、以前家

でアクション映画で見た人に魅せるそれだ。

計算し尽くされたようできて無茶苦茶。行き当たりばったりだがバカみたいに強い。そして、そのスリルを楽しんでみせてさえいる。二丁拳銃だから自分の教え子である気の強い彼女と同じ戦い方かと思っていたが、その考えを覆すような戦い方だ。

《Hey Buddy! あの純白の天使様と空中土下座美人はテメエには最高の“弾薬”だなア!》

「全くだ! 彼女たちが傍にいただけで俺の“レアスキル希少技能”が最高にイカされる!」

なのはたちが弾薬。タクヤのレアスキル希少技能。

これだけだと意味がわからないが、これ以上タクヤとオルフェイアの口からそのことに関する物は洩れなかった。

ただ白と黒の二丁拳銃を引つ切り無しに動かし、トリガーを引きまくる。大量の魔力弾がガジェット貫き、爆散。

爆風と煙の中を紅い閃光が駆け抜け、吹き飛ばす。

「ハッハアア!」

その後をガジェットが追いかけ、集団で熱線を放つ。

背中は無防備でタクヤは前にしか気づいておらず、言わば死角。熱線は距離を詰め、タクヤに迫る。

《Protection EX》

が、突如桃色のバリアがその熱線を防ぐ。

タクヤの背後。そこにはエースオブエースのなのはが、愛機レイジングハートを構えて呆れていた。

無防備。突飛。単独行動。

言いたいことは山ほどあるが、今はただこの一言。

「背中がから空きですよ？」

《Divine Buster》

全てを込めた笑顔の皮肉がタクヤに炸裂。

桃色の砲撃がガジェットドローンに炸裂。

参ったねこりゃ、と言わんばかりに苦笑を洩らしながらなのはの後ろの方を発砲。

なのはが振り向けば、背後から迫っていたガジェットに炸裂。鉄屑となり墮ちるガジェットは汚い流星だ。

「ああ、そつちもな」

トリガーガードに指を掛け、そこを支点に両の拳銃を華麗巧みに回転させてからなのはに銃口を向ける。

別に撃つ気はなく、何も出ない銃口の代わりに「BLAME!」とタクヤが呆けるのはに口ずさんだ。

背中ががら空きだ、という意味合いを込め。

そんな二人の間を金色の閃光が潜り抜ける。

圧倒的な速度で二人の間を潜り抜けたのは言わずもがなフェイトである。

「私から言わせれば、二人ともがら空きだよ?」

《Plasma Smasher》

高威力の雷撃が上空から迫りつつあったガジェットを撃滅する。

その時のフェイトの顔が微妙にドヤ顔であるのを二人は見逃さなかった。

彼女の背後から迫るガジェットも。

《Killerhornet!》

《Accel Shooter》

紅黒と桃の誘導弾がフェイトの後ろから迫っていたガジェットを貫き、爆破。

タクヤは腕を交差して構え、なのはレイジングハートを普通に構えて一言。

「お互い様で、全員背後がから空き」

あまりに息の合う二人にフェイトは鳩が豆鉄砲を喰らった様な顔になった。

合言葉はCRAZY！ 第3話『Crazy Newfac

』e

Side：ティアナ・ランスタ

初めての任務は無事に終了した。

途中、チビツ子たちは危ない目にあっただけだが、キャラ口がチ

ビ竜ことフリードの覚醒で難を逃れたらしい。

エリオもエリオで新型ガジェットを撃破したみたいだし……やるじゃない、チビツ子二人。

こっちもこっちでレリックを回収し、ガジェットドローンも全て撃破。

後はリイン空曹が暴走リニアを止めてくれれば任務は完全に終了。

これで終わり、ね。

人間達成感を得た後は自然と気が緩む物だ。

このときのあたしは正にそれだった。

それがいけなかった。

リニアの側面に貼り付いていたガジェットに気付かないだなんて。

「ティア！」

叫ぶスバルに気づき、クロスミラージュを構えるがガジェットは眼前に迫っていた。思わず来るであろう衝撃にあたしは目を瞑る。マツハキャリバーのローラーの音が聞こえるが、ここからでは距離が離れている。

死にはしないが痛みが来る！ そう覚悟した瞬間だった。

「 B I N G O ! 」

上からそんな声がし、次には耳に付く爆発音。

そして何かが落ちたような音が後ろから聞こえた。

目を開き、後ろを振り向けば黒いコートを羽織り、お面を付けた

男　　だと思つ　　が二丁の黒と白の拳銃を交差して構えていた。

S i d e : ティアナ・ランスター　　終

流れる様な速さで銃を巧みに回し、ときどき腕を交差して最後に空中に放り投げる。

空中で日の光に当てられ、鈍い光りを放つそれは吸い込まれる様にタクヤの手中に収まり、紅い光を放つてタクヤの左腕に髑髏の腕輪として姿を変える。

初対面で、しかも謎のお面の男のパフォーマン스에 新人たちは硬直する。まあ、スバルの場合は少し目が輝いているのだが。

タクヤは気にした様子もなく、お面を取らずに胸に左手を添え、恭しく優雅にお辞儀をする。

その姿はお面をしていながらもどこか様になっており、見ていた者たちはそれに魅せられていた。

それ故に反応が出来ない。

「初めまして。この様な姿で大変申し訳がないが、今日から機動六課に配属されることになった、タクヤ・D・アルバトロス二等空尉だ」

《このBuddyのデバイスが俺様、オルフェウス様だア。ハッ、よろしく頼むぜエ?》

恭しく優雅な礼儀を行うわりには敬語を使わないタクヤに、上から目線のオルフェウス。

魅せられていた雰囲気がぶち壊しである。七割以上オルフェイスだが。

なんとも毒気の抜ける態度に、新人四人は警戒も何もなくただ、ぼけーと突っ立てるだけと化す。

「さて、^{ミッションコンプリート}任務完了。俺は先にお暇させて貰おうか。んじゃ、後は機動六課で会おうか」

両手を上げてタクヤはそのまま後ずさる。

タクヤの背後には道がなく、これ以上進めば動き続けるリニアから間違いなく落ちる。

そのタクヤの奇行に気づいた新人たちは慌てて詰め寄るが、

「《 See you again 》」

そう言いながら、タクヤとオルフェイスは臆することなく一步を踏み出した。

キヤロが小さな悲鳴を上げ、急いでスバル、エリオ、ティアナが覗き込む。

そこには手を軽く振りながら、ハンニバルの板を片手で掴み、飛んでいくタクヤがいた。

お面でわからないが、なんとなくタクヤの顔が笑っていた様に新人たちに見えた。

そんな姿を空から眺めていた、なのはとフェイトは溜息を吐く。
もうなんというか、言葉が出ない。

空域を抑え終え、礼を言おうとすればいつの間にか新人たちと接触。

で、挨拶をすれば一方的に切り終え、無茶苦茶な形で新人たちの前から姿を消す。

まるで風だ。自由気儘すぎる。

けど、なんていうのだろうか。

「嫌、じゃないよね？」

「うん。楽しそうな人だね」

そんな感想を持ち、二人は新人たちと合流する。

第3話『Crazy Newface』（後書き）

やりたい放題すぎるだろって言いたいです。

FW陣とまともに会話してませんし、なんかなのはさんたちが偽者のようにしか見えないです。

あとかなりオリジナル要素を加えてすみません！

誤字よ脱字の指摘、お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4186x/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 合言葉はCRAZY！

2011年10月29日02時09分発行